

森鷗外の作品に「雁」という作品がある。

この作品の登場人物に主人公の友人で東京大学の医学部学生「岡田（おかだ）」がいるのだが、現代でいうところのいわゆるハイスペックな学生である。彼は日課として夕刻に東京大学から不忍池、上野公園等を散歩しているのだが、途中にある「無縁坂」という坂から岡田に思いを寄せる「お玉（おたま）」が彼を見つめている。ある日お玉は岡田に思いを伝えようと決心するのであるが、その日に限って岡田は友人とすき焼きを食べに行ってしまった。

後日、岡田はドイツへ留学してしまうため、お玉は思いを伝えることができないまま物語は終わってしまう。なんとも森鷗外らしい作品である。

私はこの「雁」の舞台となった無縁坂、不忍池、上野公園いわゆる「岡田コース」をしばしば散歩する。聖地巡礼と言わわれるのかもしれないが、実際小説の中のイメージであった景色を実際に目の当たりにすると物語が一層鮮明なものとして感じることができた。

また「往復5kmはあるこのコースを岡田は毎日飽きずに散歩していたものだ」、「無縁坂は実際に見ると200m程度の距離しかない。お玉は毎日同じ時間帯にこの短い坂をずっと見つめていたか」など色々思うこともできたのだ。

さらに、最近「無縁坂」を歩いていたら下駄を履いた学生らしき青年や「これが森鷗外の作品に出てくる無縁坂だよ」と会話する老夫婦、「無縁坂」をカメラに収めて思いにふけている男性に出会うなど、少しばかり素敵な時間を過ごすことができた。

私は「体験」することで知識が実感を伴って定着することができ、さらに成功や失敗等をくり返し、喜怒哀楽の感情を伴う「体験」を通じて人間的な成長につながっていくと考えている。それはコロナ禍による体験活動の制限が子どもたちの成長は大きな弊害となつたと身をもって感じたからだ。

だからこそ、私は学校における「授業」「部活動」「探究活動」「修学旅行」「文化祭」「体育祭」といった「体験」は知識の深化と人間的な成長をつなげる上で、子どもである時間でしか「体験」できない必要な活動だと感じている。

しかしながら、大事なことは単に子どもたちに「体験」させるだけではなく、子どもたちに「体験」によって何を身に付けさせたいのか、どのような大人になってほしいのか、学校のMVV（ミッション・ビジョン・バリュー）を明確にし、全ての教員の共通認識で子どもたちを成長させていくことが必要だ。

インターネットや生成AIが発展し答えがすぐに見つかる現代だからこそ、私は原点に立ち返りなぜこの「体験」を必要とするのかしっかりとと考え、子どもたちにとって良い体験となるための準備を怠ることなく子どもたちの感情や行動を成長させていくべきではないだろうか。

（J.I）